



発行：文部科学省 総合教育政策局国際教育課
編集：東京外国語大学多言語多文化共生センター「日本語能力評価方法の改善のための調査研究」事業推進委員会
監修：小島祥美（東京外国語大学） 聞く・話す／伊澤明香（関西大学） 読む／櫻井千穂（大阪大学） 書く／佐野愛子（立命館大学）
発行日：2025 年 4 月

表紙イラスト：蔡 雨飛 王 晨好（兵庫県立芦屋国際中等教育学校 1 年）

「私たちの作品は、世界地図上で各国の人々が手を繋いで幸せそうに笑っている様子です。この作品を通じて、戦火や冷戦を超えた世界平和を願っています。人々が偏見や差別を捨て、心から心へと交流し、この美しい世界で一緒に幸せに暮らすことを願っています。」



文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための

ことばの発達と習得のものさし (略して「ことばの力のものさし」)

何のために評価する？

- ことばの力のものさしは、多文化多言語の子どもの年齢に伴う認知的な発達を支えることばの力を捉えるためのものです。
- 一人ひとりの子どもに応じた学習・指導計画を立てるために行う「学習を支える評価」です。

誰の何を評価する？

- 小学校段階から高等学校段階までの子どものことばの力を評価します。
- 一人でできることだけでなく、支援を得て発揮できる最大限の力を評価します。
- 年齢に伴うことばの発達と日本語習得の各段階に応じて、評価の目安となる重要な力に絞って記述しています。

思考・判断・表現を支える包括的なことばの力(複数言語での力)の発達ステージとは？

- 日本語も母語もあわせて、子どもが持っているすべてのことばのレパートリーを使って、最大限にできることを、次の観点から、A～Fの6つのステージで評価します。
- ステージが一段階進むのには、数年かかるのが一般的です。

「包括的なことばの発達ステージ」の各段階の特徴

	年齢枠の範囲			各ステージの特徴
ステージF 【評価・発展期】	中3～高校 段階			中学～高校の教科学習内容、抽象的概念、実社会の話題 多角的・批判的視点からの議論・意見、分析・評価、推敲
ステージE 【抽象】期	小5～中2 段階			高学年～中学の教科学習内容、抽象的概念 主題・要点の解釈、一貫性のある説明、ジャンル別作文
ステージD 【因果】期	小3～小4 段階			中学年の教科学習内容、基本的概念 因果関係の理解・説明、テーマ作文
ステージC 【順序】期	小1～小2 段階			身近なこと・経験したこと、低学年の内容 順序に沿った理解・表現、出来事作文
ステージB 【イマココから順序】期				身近なこと・経験したこと、幼児・低学年前半の内容 対話による支援を得て、おおまかに理解・表現
ステージA 【イマココ】期				身近なこと・経験したこと、幼児・低学年前半の内容 対話による支援を得て、断片的に理解・表現

日本語固有の知識・技能の習得ステップとは？

- 日本語の知識・技能の習得状況を次の観点から、8つのステップで評価します。
- ステップの進み具合は個人差が大きいです。数ヶ月でいくつものステップを進めるケースもあれば、数年同じステップにとどまるケースもあります。

「日本語の習得ステップ」の各段階の特徴

	小1～小2段階	小3～小4段階	小5～中2段階	中3～高校段階
ステップ8				中学から高校レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章
ステップ7				高学年から中学レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章
ステップ6				中学年レベルの教科学習に必要な語彙・表現、談話・文章
ステップ5	日常的な語彙・表現（幅広い）、 低学年レベルの談話・文章（自由な単文・重文・複文の生成）			
ステップ4	日常的な語彙・表現（制限あり）、単文から基礎的な重文・複文			
ステップ3	身近な語彙・表現、単文			
ステップ1～2	ごく限られた語、文字の習得の開始			

評価から指導・支援へ

- 学校や家庭、地域の学習教室などで、子どもの普段の生活や学習の様子を、多角的・包括的に観察しながら活用します。
- DLAやその他のアセスメント、テストとの併用、母語でのアセスメントも効果的です。
- 「包括的なことばの発達ステージ」を横軸、「日本語の習得ステップ」を縦軸として示すマトリックス図を使って、対象の子どものことばの現在の力を確認します。
- 「包括的なことばの発達ステージ」には、日本語と母語の4技能の中で一番高いステージを記します。
- 年齢枠の目安との位置関係を確認し、学習・指導計画の中で、子どもの強みを活かしながら、目標の位置を決めます。
- 子どもの「わかる!」「できる!」を大切に、学習・指導計画を考えます。

ステージとステップのマトリックス図 (滞日4か月の中学2年生：E2～3のケース)

ステージ	A 【イマココ】期	B 【イマココから順序】期	C 【順序】期	D 【因果】期	E 【抽象】期	F 【評価・発展】期
ステップ8	書く 読む 聞く・話す					中3～高校の目安
ステップ7	書く 読む 聞く・話す				小5～中2の目安	
ステップ6	書く 読む 聞く・話す		小3～小4の目安			
ステップ5	書く 読む 聞く・話す	小1～小2の目安				
ステップ4	書く 読む 聞く・話す					
ステップ3	書く 読む 聞く・話す					
ステップ2	書く 読む 聞く・話す					
ステップ1	書く 読む 聞く・話す					

母語で年齢相応のテキストを読み、要点を理解できる

3ヶ月後の目標を一段階上のステップに設定

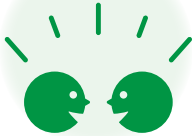
日本語で、身近な基本的な語彙・表現等を使って単文を書いたり、そのレベルのテキストを読んだりできる

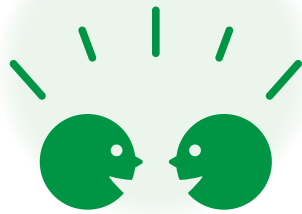
覚えたばかりの決まった形を使ってやりとりができる

目標

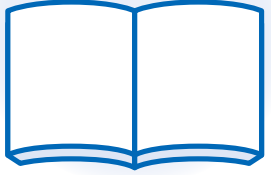
現在の力

現在の力

	年齢枠	思考・判断・表現を支える包括的なことばの力（複数言語での力）の発達ステージ	〈聞く・話す〉
ステージF 【評価・発展】期	聞く・話す 	・ 中学から高校の教科学習内容（抽象的な概念、実社会に関わる話題など）について、多角的・批判的視点をもった議論ができる。 ・ 論理的構成を意識し、根拠に基づいた効果的なプレゼンテーションができる。 ・ 反論できる論理の展開を考え、説得力のある意見を述べることができる。	
ステージE 【抽象】期	高校～中3段階	・ 小学校高学年から中学の教科学習内容（抽象的な概念など）について、事実と意見の違いを意識しつつ、共通点や相違点を整理して議論できる。 ・ 構成を意識し、ICTなどを活用しながら聞き手にわかりやすいプレゼンテーションができる。 ・ 場面や相手に応じて適切な語彙や表現などを選択できる。 ・ 論拠を示しながらおおむね一貫性のある意見を述べることができる。 ・ 複数の段落からなるまとまりのある話を要約して話せる。	
ステージD 【因果】期	中2～小5段階	・ 教科学習内容の基本的な概念（小学校中学年程度）について、因果関係を含めて説明できる。 ・ 教科学習内容の基本的な概念（小学校中学年程度）についての説明を聞いて理解できる。 ・ 集めた情報を示しながら、授業で発表できる。 ・ 具体的な事例とともに理由を挙げながら、自分の意見を述べることができる。	
ステージC 【順序】期	小4～小3段階	・ 自分に関係のあることや体験したことについて、順序にそってくわしく話せる。 ・ 身近なことや経験したことに関連した学習内容を聞いて話の流れを理解し、感想とその理由が言える。 ・ 身近なことや経験したことに関連した学習内容についての話し合いの場で、教師や友達の話を聞いて発言できる。	
ステージB 【イマココから順序】期	小2～小1段階	・ 対話による支援を得て、身近なことや経験したことについて、順序にそっておおまかに話せる。 ・ 身近なことや経験したことに関連した学習内容を聞いておおむね理解し、ひとこと程度の感想が言える。 ・ 自分が聞きたいことを質問できる。	
ステージA 【イマココ】期		・ 対話による支援を得て、身近なことや経験したことなどについて、覚えている場面を断片的に話せる。 ・ 対話による支援を得て、ごく簡単な質問（例：誰が、何が / を、どんな / どうした、など）に答えられる。	

	日本語固有の知識・技能の習得ステップ			〈聞く・話す〉	
	小1～小2段階	小3～小4段階	小5～中2段階	中3～高校段階	
ステップ8	聞く・話す 			・教科学習内容の抽象的な概念の話、実社会に関わる話題の話など（中学・高校レベル）を既習の抽象的な概念語彙・表現を幅広く使って話せる。 ・このような話を自然な速さで聞き取ることができる。	
ステップ7				・高学年から中学レベルの既習の慣用的な表現やよく使われる語の組み合わせ（コロケーション、例：○仲が良い、×仲が近い）といった表現（単語や句）のレパートリーが増え、これらを適切に使える。 ・相手や場面に応じておおむね適切な敬語表現が使える。 ・目的（例：プレゼンテーション、フォーマルな場面など）に応じて語体（普通体、です・ます体）を選択して話せる。 ・教科学習内容の抽象的な概念の話（高学年・中学レベル）を既習の抽象的な概念語彙・表現を使って話せる。 ・このような話を自然な速さで聞き取ることができる。	
ステップ6				・様々な接続表現や指示語などを用いて、まとまり（結束性）がある話ができる。 ・教科学習内容の基本的な概念の話（中学年レベル）を既習の基本的な概念語彙・表現を使って話せる。 ・このような話を自然な速さで聞き取ることができる。	・教科学習内容の抽象的な概念の話（高学年・中学レベル）を既習の基本的な概念語彙・表現（中学年レベル）で代用して話せる。 ・このような話を少しゆっくりの速さで聞き取ることができる。
ステップ5	・身近な場面や関心のある話題について、日常的な語彙・表現を幅広く使って、対話をしたり自分から話したりできる。 ・高頻度の接続表現（例：～から、～て、でも）を活用して、単文や簡単な複文を用いてほぼ誤用なく自由に、話を続けることができる。 ・身近なことや関心のある話題について、まとまりがある話を自然な速さで聞き取ることができる。 ・相手や場面に応じて、「です・ます体」が使える。				
	※音声イメージ（例：「フーって」、「木をビーって切る」）や直接引用（例：謝って→「ごめんなさい」って言って）をよく使って話す。	※日常的な語彙・表現を使うなどして、概念語彙・表現を補って話すことがある（例：「地球が汚染される」を表現するのに→「地球が大変になる」）。			
ステップ4	・自分自身や日常的な話題（学校や家庭での過去の活動や個人の経験など）について、対話による支援を得て、よく耳にする語彙・表現を使って、単文や簡単な複文で話せる。	・身近な場面や関心のある話題（学校や家庭での過去の活動や個人の経験など）について、日常でよく耳にする語彙・表現を使って、単文や簡単な複文で話せる。	・身近な場面や関心のある話題（学校や家庭での過去の活動や個人の経験など）について、既習の語彙・表現・文型を使って、単文や簡単な複文で話せる。		
	・日常生活や学校生活で、教師や友だちに働きかけるために必要最低限のやりとりができる（お願いをする[例：「消しゴム貸して」]、誘う[例：「あそぼ」]）。	・場面に応じて、必要な情報を含むやりとりができる（時間や場所を確認して約束する、理由を伝えて謝るなど）。			
	※音声イメージ（例：フーって、木をビーって切る）、指さしやジェスチャー、指示語を使って、語彙・表現の不足を補って話すことがある。	※ 簡単な表現、言い回し （例：楽器を演奏する→楽器をやる）や 母語 を活用して、語彙・表現の不足を補って話すことがある。			
ステップ3	・自分自身や日常的な話題について、対話による支援を得て、よく耳にする語彙・表現を使って主に単文でなんとか意味の通じる話ができる。	・身近な場面や関心のある話題について、誤用（形容詞や動詞など、述語の活用や助詞）があっても、既習の基本的な語彙・表現・文型を使って、主に単文でなんとか意味の通じる話ができる。			
	・日常生活や学校生活で、教師や友だちに働きかけるために必要最低限のやりとりができる（お願いをする[例：「消しゴム貸して」]、誘う[例：「あそぼ」]）。	・日常生活や学校生活で、教師や友だちに働きかけるために必要最低限のやりとりができる。（お願いをする[例：「消しゴムを貸してください」]、誘う[例：「一緒に帰ろう」]）。			
	※音声イメージ（例：「フーって」、「木をビーって切る」）、指さしやジェスチャー、指示語を使って、語彙・表現の不足を補って話すことがある。	※指さしやジェスチャー、指示語、 母語 を活用して、語彙・表現の不足を補って話すことがある。			
ステップ2	・自分自身のことなどについて、教師や友だちなどのゆっくりはっきりした質問に、よく耳にする語彙・表現の一部を使って答えることができる（例：「牛乳好き」「本ある」）。 ・よく使われる定型表現を使って、日直などの係（例：朝・帰りの会の司会、授業や給食の挨拶）ができる。 ・日常生活や学校生活で簡単な質問（例：持ち物「えんぴつ？」）ができる。 ・覚えたばかりの決まった形を使ってやりとりができる（困りごとを伝える[例：「お腹が痛い」]、お礼を言う[例：「ありがとう」]、許可を取る [例：「先生トイレ」]）。			・自分自身のことなど（家族の構成、好きなもの/こと、将来の夢、日常の出来事など）について、教師や友だちなどのゆっくりはっきりした質問に、既習の語彙・句や単文、よく使われる表現を使って答えることができる。 ・日常生活や学校生活で簡単な質問（例：移動教室「どこに行きますか？」）ができる。 ・覚えたばかりの決まった形を使ってやりとりができる（困りごとを伝える[例：「お腹が痛い」]、お礼を言う[例：「ありがとう」]、許可を取る [例：「先生トイレに行ってもいいですか」]）。	
	※指さしやジェスチャー、指示語（例：これ）、会話表現（例：「朝ご飯を食べる」を表現するのに→「いただきます」）、母語を交えながらなんとか伝えようとする。			※指さしやジェスチャー、指示語（例：これ）、会話表現（例：「朝ご飯を食べる」を表現するのに→「いただきます」）、母語を交えながらなんとか伝えようとする。	
ステップ1	・自分自身（例：名前・学年・歳など）について、教師や友だちなどのゆっくりはっきりした質問に、限られた単語で答えることができる。 ・基本的な挨拶（例：「おはよう」）ができる。 ※指さしやジェスチャー、指示語（例：これ）、会話表現（例：「朝ご飯を食べる」を表現するのに→「いただきます」）、母語を交えながらなんとか伝えようとする。			・よく耳にする単語やその一部を口にする。 ・質問されても答えずに、沈黙する場合がある。 ・指示の意味が理解できなくても、周りの行動を真似たり（例：「起立、礼」）、質問の意味が十分理解できなくても、反応したり（例：うなずく）教師や友だちが言ったことをおもう返したりする。	
	・周りの状況を見たり、既存の知識を使って、相手が何を言っているのか推測したりしようとする。 ・周りの状況に合わせて行動する（例：教科書を取り出す）。 ・聞いた内容を確認するために教師や友だちが言ったことを繰り返したり、聞き取れない場合は、繰り返し言ってもらうように催促したりする（例：「もう一度」）。				

	年齢枠	思考・判断・表現を支える包括的なことばの力（複数言語での力）の発達ステージ	〈読む〉
ステージF 【評価・発展】期	読む 	・中学生から高校生向けの文学作品において、テキストの表現を吟味しつつ、主題をとらえ、作品全体を鑑賞できる。 ・中学生から高校生向けの論説文において、構成や論理の展開に注意しつつ、テキストの根拠に基づいて要点を的確に理解できる。 ・理解を深めるために、高度な読解ストラテジーを活用できる（ステージA～Eに加えて、多角的・批判的視点から内容进行评估する、比喩表現を読み解く、書き手の表現選択に含まれた意図を読み解く、関連する他のテキストやICTで重要な情報を収集し、課題や目的に応じて比較・統合する）。 ・テキストに関連して、複数の文化（ものの見方、価値観を含む）を比べて、多角的・批判的に考え、評価できる。	
ステージE 【抽象】期		・小学校高学年から中学生向けの物語文において、テキストの表現について解釈しながら、作品の主題を理解できる。 ・小学校高学年から中学生向けの説明文において、テキストの根拠に基づいて、要点を理解できる。 ・課題や目的に応じて、ICTを活用するなどして、必要な情報を収集できる。 ・理解を深めるために、豊富な読解ストラテジーを活用できる（ステージA～Dに加えて、テキスト構造を読み取る、自分の理解度を継続的にモニターする、要約や言い換えをしながら読む、テキスト内から根拠を見つける）。 ・目的に応じてレベルや内容の適切な本やテキストを自分で選ぶことができる。	
ステージD 【因果】期		・小学校中学年向けの物語文・説明文において、段落の関係や内容の結びつき（因果関係、情景・心情の変化など）を理解できる。 ・理解を深めるために、さまざまな読解ストラテジーを活用できる（ステージA～Cに加えて、一般的な物語の構造に対する知識から流れを推測する、テキストの中で大事な情報が何なのかを考えながら読む、具体例を考えながら読む、タイトルや目次・図表から内容を推測する、内容について疑問を持ちながら読む、前後の文脈や持っている知識を活用して未知の語彙の意味を推測する、わからないことを辞書やネットで調べる、強いほうのことばの力を活用する）。 ・テキストに関連して、複数の文化の類似点・相違点を考えることができる。 ・関心のある話題について本を自分で選ぶことができる。	
ステージC 【順序】期		・小学校低学年向けの物語文において登場人物や場面を捉え、大事な内容を順序にそって最後まで理解できる。 ・小学校低学年向けの説明文において、大事な情報を取り出すことができる。 ・理解を深めるために、いくつかの読解ストラテジーを活用できる（ステージA、Bに加えて、頭の中でイメージ（絵・図・映像）化する、テキストと自分の体験を結びつける、原因・理由を考える、一部を読んで先を予測する）。 ・テキストに見られる複数の文化の特徴（代表的なもの）に気がつく。 ・自分で好きな本を選ぶことができる。	
ステージB 【イマココから順序】期	小2～小1段階	・幼児・小学校低学年前半向けの物語文において、対話による支援を得て内容を順序にそっておおまかに理解できる。 ・理解を深めるために、限られた読解ストラテジーを活用する（ステージAに加えて、テキストを読み返す、わからないことを他の人に質問する）。	
ステージA 【イマココ】期		・幼児・小学校低学年前半向けの物語文において、対話による支援を得て大まかな内容（誰が、何が/を、どんな/どうした、など）を断片的に理解できる。 ・さし絵や写真から意味や内容を推測しようとするなど、読解ストラテジーを使い始める。 ・絵本や図鑑で好きな箇所を示すことができる。 ・意欲的に読もうとする。	

	日本語固有の知識・技能の習得ステップ			〈読む〉
	小1～小2段階	小3～小4段階	小5～中2段階	中3～高校段階
ステップ8	読 む 			中学生から高校生向けのテキスト（小説・文学作品、論説文、新聞・雑誌の報道文、インターネット情報などの幅広いジャンル（DLA〈読む〉の「水の東西」など）を文や意味のまとまりで区切って、安定した速さで流暢に読める。 ・中学・高校レベルの既習の漢字・語彙・表現がおおむねわかる。
ステップ7				・高学年から中学生向けのテキスト（ライトノベル、情報文、子ども新聞・雑誌、子ども向けインターネット情報など（DLA〈読む〉の「自然を守る」など）を文や意味のまとまりで区切って、安定した速さで流暢に読める。 ・高学年から中学レベルの既習の漢字・語彙・表現がおおむねわかる。 ※母語での読む力が高い場合、音読が流暢でなくても、このレベルのテキストを読んで理解できる。
ステップ6				・中学年向けのテキスト（やや長めで章立てのある、少しの挿絵や振り仮名つきの物語文や文章構造がはっきりした写真・イラスト・図表つきの社会・理科学的内容の説明文（DLA〈読む〉の「貝がら」など）を、おおむね文や意味のまとまりで区切って流暢に読める。 ・中学年レベルの既習の漢字・語彙・表現がおおむねわかる。 ・黙読ができる。 ※母語での読む力が高い場合、音読が流暢でなくても、このレベルのテキストを読んで理解できる。
ステップ5	・低学年向けのテキスト（身近で興味のあるトピックで、短いストーリーの挿絵つきの物語文や、写真・イラストが豊富なごく短い説明文（DLA〈読む〉の「花いっぱいになあれ」など）を、意味のまとまりや文節で区切りながら、ややゆっくりでも安定した速さで読める。 ・低学年レベルの漢字・語彙・表現がおおむねわかる。 ・文字の読み間違いに自分で気づいて訂正したり、単語や文法の意味を考えながら読むことができる（意味がわからない語の前で止まったり、戻ってきて考えてから語のまとまりで読んだり、区切り方を変える）。			・日常で用いられる幅広い語彙や単文・複文で書かれた、イラストや写真つきの短いテキスト（DLA〈読む〉の「あつまれ、楽器」など）や、年齢相応のトピックで、語彙・表現や文章構造が低学年レベルのテキストを意味のまとまりや文節で区切りながら、ややゆっくりでも安定した速さで読める。 ・低学年レベル／日常で用いられる既習の漢字・語彙・表現がおおむねわかる。 ※母語での読む力が高い場合、黙読の方がよく理解できたり、音読が流暢でなくても、このレベルのテキストを読んで理解できる。
ステップ4	・幼児向けの絵本や図鑑（身近で興味のあるトピックで、ごく短いストーリーの絵本や、文字数の少ないごく簡単な図鑑（DLA〈読む〉「ことりと木のは」など）を、おおむね文節や単語で区切りながらゆっくり読める。 ・長音・拗音・促音を含むひらがな・カタカナで書かれた日常的な単語がおおむね読める。 ・助詞の特殊読み（「は」「へ」）がおおむねできる。 ・カタカナがおおむね読める。 ・指で文字をなぞりながら読むこともある。	・低学年向けのテキスト（身近で興味のあるトピックで、短いストーリーの挿絵つきの物語文や、写真・イラストが豊富なごく短い説明文（DLA〈読む〉の「花いっぱいになあれ」など）を、おおむね文節や単語で区切りながらゆっくり読める。 ・低学年レベルの漢字がいくつか読める。 ・指で文字をなぞりながら読むこともある。	・身近なトピックについて、日常で用いられる語句や単文、基本的な複文で書かれた、イラストや写真つきの短いテキストを、おおむね文節や単語で区切りながらゆっくり読める。 ・日常で用いられる基本的な既習の漢字・語彙・表現がおおむねわかる。 ・文字の読み間違いに自分で気づいて訂正したり、単語や文法の意味を考えながら読むことができる（意味がわからない語の前で止まったり、戻ってきて考えてから語のまとまりで読んだり、区切り方を変える）。 ・指で文字をなぞりながら読むこともある。	
ステップ3	・幼児向けのごく短い絵本（表現や内容の繰り返しのある絵本（「おおきなかぶ」、DLA〈読む〉の「えんそくのおとしもの」など）を、かなりゆっくりと、2・3文字ずつの拾い読みや単語で区切りながら読める。 ・連絡帳や時間割などで毎日使うマーク（例：宿題→し、国語→こく）がわかる。 ・絵や写真を手がかりに、長音・拗音・促音のをぞくひらがなで書かれた日常的な単語がおおむね読める。 ・カタカナがいくつか読める。 ・ひらがな・カタカナの区別がおおむねできる。 ・ひらがながおおむね読める。 ・指で文字をなぞりながら読む。	・幼児向けのごく短い絵本（表現や内容の繰り返しのある絵本（「おおきなかぶ」、DLA〈読む〉の「えんそくのおとしもの」など）を、2・3文字ずつの拾い読みや単語で区切りながらなんとか読める。 ・連絡帳や時間割などで毎日使うマーク（例：宿題→し、国語→こく／国）がわかる。 ・絵や写真を手がかりに、長音・拗音・促音のをぞくひらがなで書かれた日常的な単語がおおむね読める。 ・カタカナがいくつか読める。 ・ひらがな・カタカナの区別がおおむねできる。 ・ひらがながおおむね読める。	・身近なトピックについて、日常で用いられる基本的な語句や単文で書かれた、イラストや写真が中心の短いテキスト（DLA〈読む〉の「ハチの話」など）を、かなりゆっくりと、おおむね文節や単語で区切りながら読める。 ・日常で用いられるごく基本的な既習の漢字がいくつか読める。 ・長音・拗音・促音を含むひらがな・カタカナで書かれた日常的な単語がおおむね読める。 ・助詞の特殊読み（「は」「へ」）がおおむねできる。 ・指で文字をなぞりながら読む。	
ステップ2	・ひらがながいくつか読める。 ・支援者と一緒に／支援者に続いて1文字ずつの拾い読みができる。 ・本を正しくもって、正しい方向にページをめくることができる。	・幼児向けのごく短い絵本（表現や内容の繰り返しのある絵本（「おおきなかぶ」、DLA〈読む〉の「えんそくのおとしもの」など）を、2・3文字ずつの拾い読みや単語で区切りながらなんとか読める。 ・連絡帳や時間割などで毎日使うマーク（例：宿題→し、国語→こく／国）がわかる。 ・絵や写真を手がかりに、長音・拗音・促音のをぞくひらがなで書かれた日常的な単語がおおむね読める。 ・カタカナがいくつか読める。 ・ひらがな・カタカナの区別がおおむねできる。 ・ひらがながおおむね読める。	・いくつかの既習の定型表現や語句、限られた文型を用いて書かれた、イラストや写真が中心の短いテキスト（DLA〈読む〉の「カラスと水さし」など）を、2・3文字ずつの拾い読みや単語で区切りながら、なんとか読める。 ・長音・拗音・促音のをぞくひらがなで書かれた日常的な単語がおおむね読める。 ・カタカナがいくつか読める。	
ステップ1	・学校で目にする日本語の文字に興味を示す。 ・自分の名前や学年・組など、自分に関係のある語がわかる。 ・日本語の読み聞かせに興味を示す。	・学校で目にする日本語の文字に興味を示す。 ・自分の名前や学年・組など自分に関係のある語がおおむねわかる。 ・支援者と一緒に／支援者に続いて、1文字ずつの拾い読みができる。 ・ひらがながいくつか読める。 ・日本語の読み聞かせに興味を示す。	・自分の名前や学年・組、学校名など、自分に関係のある語がおおむねわかる。 ・連絡帳や時間割などで毎日使うマーク（例：宿題→宿、国語→国）がわかる。 ・支援者と一緒に／支援者に続いて、1文字ずつの拾い読みができる。 ・ひらがながおおむね読める。 ・日本語にひらがな・カタカナ・漢字の区別があることがわかる。	

※小5～中2段階、中3～高校段階の青色の網掛けの部分は、幼少期から複数言語環境で育つ子どもの日本語の読む力の習得とは異なり、母語で読む力を習得してから、第二言語としての日本語の読む力を習得する場合の特徴が記述されています。

	年齢枠		思考・判断・表現を支える包括的なことばの力（複数言語での力）の発達ステージ	〈書く〉
ステージF 【評価・発展】期	書 < 	高校～中3段階	書く前に、構成や長さ（情報の分量）、時間配分、読み手のことや目的を考えて計画を立て、自分からアウトラインをつくることができる。 書きながら、あるいは書いた後に、目的に応じて内容がより明確／効果的に伝わるように自分から推敲することができる。 内容を効果的に伝えるために、構成や書き出し、結びを工夫し、適切な表現技法（比喩など）を選ぶことができる。 社会的・文化的话题や教科学習で扱う話題について、目的に応じて情報を収集し、その真偽を吟味し、論理的な説明文が書ける。 目的に応じて、必要な資料を適切に引用し、客観的な論拠を示したり、反論への再反論を想定したりしながら多角的・批判的な視点のある意見文・論説文が書ける。 実体験や想像上の出来事について、文学的要素（設定、視点、構成・展開）を取り入れて、読み手に訴えかける創作的な作品（ショートストーリーや物語・詩など）が書ける。	
ステージE 【抽象】期				
ステージD 【因果】期				
ステージC 【順序】期				
ステージB 【イマココから順序】期				
ステージA 【イマココ】期	小2～小1段階	中2～小5段階	書く前に、ペアやグループでの話し合いなどを通して、図やキーワードなどを用いたアウトラインを作ったりして書く準備ができる。 書いた後に、教師やクラスメートの助言を得て、一貫性に気をつけながら推敲ができる（不要なものを削除する、順番を入れ替える、必要なものを追加するなど）。 社会的・文化的话题や教科学習で扱う話題について、論理的に必要な情報が入った説明文がおおむね書ける。 社会的・文化的话题や教科学習で扱う話題について、根拠となる事実や具体例を示しながら意見文がおおむね書ける。 自分の経験をもとに読み手に訴える創作的な作品（ショートストーリーや物語・詩など）がおおむね書ける。	
		小4～小3段階	書く前に、促されればメモをしたり、下書きを書いたりして構想を練ることができる。 わからない語彙や表現について、辞書などを使って自分で調べながら書くことができる。 書いた後に、促されれば、読み返して文章のまとまりに気をつけながら、推敲ができる。 段落の関係や内容の結びつき（因果関係など）を意識して、テーマ作文（意見文・説明文・できごと作文など）が書ける。	
		小2～小1段階	クラス全体の話し合い（読み手に対する意識/内容/目的について）を通して書き始めることができる。 自分の興味がある身近なトピックや経験したことについて、順序にそってくわしく書きすすめることができる。	
			支援者との対話をてがかりに、身近なことや経験したことについて、頭にうかんだことを順序にそっておおまかに書きすすめることができる。	
			支援者との対話をてがかりに、身近なことや経験したことについて、頭にうかんだことをひとつずつ、語、句、単文にしていくことができる。	

	日本語固有の知識・技能の習得ステップ			〈書く〉	
	小1～小2段階	小3～小4段階	小5～中2段階	中3～高校段階	
ステップ8	書 く 			・抽象的な概念語彙・低頻度語彙・漢熟語を使って中学生・高校生レベルの説明文や論説文、論評文、創作的な作品などが書ける。 ・書きことばらしい表現や文法（受身表現や名詞句の活用など）、及び創造的な表現技法（比喩など）を使用して文章が書ける。 ・敬語などの相手や場に応じたことば遣いを適切に使って文章が書ける。	
ステップ7				・高学年から中学レベルの既習の慣用的な表現やよく使われる語の組み合わせ（コロケーション）といった表現のレパートリーが増え、これらをおおむね適切に使える。 ・高学年から中学レベルのテキストで使用される概念語彙や低頻度語彙・漢熟語などの表現をおおむね適切に選択し、一貫して書きことばらしい文章が書ける。	※母語での書く力が高い場合、誤用があっても書きことばらしい文章が書ける。
ステップ6				・さまざまな接続表現、指示語などを使って、ある程度文や段落のまとまり（結束性）がある文章が書ける。 ・口語的な表現（例：ちょっと、すごい）が混ざることもあるが、中学年レベルのテキストで使用される概念語彙や低頻度語彙・表現、連体修飾節（例：小説が好きな人、食べたことがない料理）や書きことばらしい文体（例：行って→行き、見ないで→見ず、）などを使いながら文章が書ける。 ・「だ体・である体」を使って文章が書ける。	※母語での書く力が高い場合、誤用があっても中学年レベルの既習の語彙・表現や文型を使って、まとまりのある文章が書ける。
				・おおむね正確な表記ができる（撥音・長音・拗音・促音やひらがな・カタカナの使い分け、既習でなじみのある漢字、一字下げ、句読点、引用符、助詞の「は」「を」「へ」など）。 ・「です・ます体」を使って文章を書き進められる。	
ステップ5	・自分自身にとって身近な場面や関心のある話題について、日常的な会話で用いられる高頻度の語彙・表現や接続表現（例：～から、～で、でも）を幅広く使って、単文や重文、簡単な複文などを用いた文章をほぼ誤用なく自由にたくさん書ける。 ・書きながら、あるいは書いた後に、読み返したり支援者に読んでもらったりして自分の間違いに気づいて修正できる。	・自分自身にとって身近な場面や関心のある話題について、日常的な会話で用いられる高頻度の語彙・表現や接続表現（例：～から、～で、でも）を幅広く使って、単文や重文、簡単な複文などを用いた文章をほぼ誤用なく自由にたくさん書ける。 ・書きながら、あるいは書いた後に、読み返して自分の間違いに気づいて修正できる。	・日常的な会話で用いられる高頻度の語彙・表現や接続表現（例：～から、～で、でも）を幅広く使って、単文や重文、簡単な複文などを用いた文章をほぼ誤用なく自由にたくさん書ける。 ・書きながら、あるいは書いた後に、読み返して自分の間違いに気づいて修正できる。		
	※母語での書く力が高い場合、文法や語彙の選択に誤用があるが、単文や重文、簡単な複文を用いた文章を自由に書ける。				
ステップ4	・表記の誤用はあるが、対話文の形式を用いて（例：～したよ）、日常的な会話で用いられる高頻度の語彙・表現を繰り返し使って、主に単文で短い文章が書ける。 ・カタカナがおおむね書ける。	・表記や文法には誤用があるが、日常的な会話で用いられる高頻度の語彙・表現を繰り返し使って、重文、簡単な複文を含みつつ主に単文で短い文章が書ける。	※母語での書く力が高い場合、文法や語彙の選択に誤用があるが、既習の語彙・表現や文型を使って、単文や重文、簡単な複文を用いた文章が書ける。	・表記や文法、語彙の選択に多くの誤用があるが、学校生活や日常生活で用いられる既習の語彙・表現や文型を使って、単文や重文、簡単な複文を用いた文章が書ける。	
				※日本語の話す力が強い場合、表記には多くの誤用があるが、口語的な作文が書ける。	
ステップ3	・対話による支援を得て、自分に関わる高頻度の語彙・表現を繰り返し使って、単文が2、3文書ける。 ・ひらがながおおむね書け、カタカナがいくつか書ける。	・対話による支援を得て、自分に関わる高頻度の語彙・表現を繰り返し使い、単文を連ねて短い文章が書ける。 ・ひらがな・カタカナをおおむね区別しながら書くことができる。	※母語での書く力が高い場合、支援なしで基本的な既習の語彙・表現や文型を使って、単文を連ねて文章が書ける。	・自分自身にとって身近な場面や関心のある話題について、学校生活や日常生活で用いられる基本的な既習の語彙・表現や文型を使って、単文を連ねて文章が書ける。	
ステップ2	・対話による支援を得て、単語を並べて伝えたいことを断片的に書くことができる。 ・ひらがながいくつか書ける。	・対話による支援を得て、単語を並べて伝えたいことを断片的に書くことができる。 ・ひらがながおおむね書け、カタカナがいくつか書ける。	・モデル文を参考にして、自分自身にとって身近な話題（自分や家族の紹介、好きな物、休みの日、将来の夢など）についていくつか文が書ける。		
ステップ1	・はじめて文字を習得している段階で、一文字一文字確認したり、支援者と話しながら書きたいことのお手本の文字を示してもらいそれをまねして書こうとしたり、文字に対応する音を口に出して言いながらゆっくりと書こうとする。 ・数字や、自分の名前など身近な文字をひらがなまたはカタナで書ける。 ・書こうとする内容を絵にする場合もある。 ・文字に興味を示す。	・ひらがな・カタカナをおおむね区別して確認しながら知っている単語を書くことができる。 ・数字や、自分の名前など身近な文字をひらがなまたはカタカナで書ける。 ・書こうとする内容を絵にする場合もある。 ・文字に興味を示す。	・ひらがな・カタカナをおおむね区別して確認しながら知っている単語を書くことができる。 ・母語の単語や表現をそのままひらがな・カタカナを使って書こうとする。（例：かんとり（country））。		

※小5～中2段階、中3～高校段階の朱色の網掛けの部分は、幼少期から複数言語環境で育つ子どもの日本語の書く力の習得とは異なり、母語で書く力を習得してから、第二言語としての日本語の書く力を習得する場合の特徴が記述されています。 ※黄色の網掛けの部分は、読み書きの経験が少なく、ここにとどまるケースです。